

ケアする映画をたどる

主催：国立国際美術館、国立映画アーカイブ

協賛：ダイキン工業現代美術振興財団

国立国際美術館地下 1 階講堂 参加無料・各プログラム入れ替え制（全席自由、先着 100 名）

2023 年 3 月 18 日（土）

13:00- A プログラム*

15:30- B プログラム

17:30- C プログラム

2023 年 3 月 19 日（日）

10:30- D プログラム*

13:30- E プログラム

15:50- F プログラム

*冒頭に担当者による解説を行います。



《おてんとうさまがほしい》撮影風景 写真提供：貞末麻哉子

第 24 回中之島映像劇場では、「ケア」という主題から戦後日本のドキュメンタリー映画に流れる水脈に光をあてます。“care”(ケア)は、健康に対する配慮やそのための手助けといった行動を指しますが、看護や介護、福祉、保育の現場のみならず、生存に関与するあらゆる空間で実践されているものです。地域や社会のなかで孤立し、苦しみを抱えるケアの受け手と与える者との繋がりが、既存の人間関係に縛られない、新たな共同性を創発することさえあります。個人の判断と責任が強く求められる現代の社会状況で、生の営みがいかに多様なアクターとの連関のなかで支えられているかを、ケアの思考は喚起します。

ケアの概念は、近年のアートおよび映像表現の世界でも関心を集めていますが、過去の記録映画の取り組みをたどる導きの糸にもなるはず。福祉映画の巨匠・柳澤壽男が「撮りながら考え、考えながら撮る」と述べたように、優れたドキュメンタリーには、制作過程で試行錯誤しながら、「ケアとは何か」を問い直してきた痕跡が認められます。それは医師が患者に行う治療行為が時に直線的であるのに対し、ケアが他者との応答を繰り返し、失敗も挟みながら調整を進める過程とも重なるものです。単なる介護や福祉の場の記録ではなく、映画がどのようにケアの空間に寄り添い、容易に答えの出ない問いと向かい合ってきたか、上映を通して考える機会になることを願っています。

今回の特集上映のために作成した本配布資料では、上映される「ケアする映画」について、さらに思索を深める機会を得るため、下記の方々に寄稿をお願いいたしました。佐藤真とも親交のあった、映画批評家で京都芸術大学教授の北小路隆志氏には、佐藤が構成・編集を担当した《おてんとうさまがほしい》の分析を通し、現代映画の諸問題にアプローチする論考をご執筆いただきました。また東京の映画美学校ドキュメンタリー・コースで佐藤に師事した、映画《チーズとうじ虫》の監督である加藤治代氏からは、佐藤による私家版の作品《保育園の日曜日》をめぐるエッセイをお寄せいただきました。柳澤壽男の福祉五部作をめぐる卓抜な論文を発表されている深田耕一郎氏からは、柳澤の監督した《夜明け前の子どもたち》の解題を書き下ろしていただいております。そして、《息の跡》(2016年)、《空に聞く》(2018年)などのドキュメンタリーを発表されてきた気鋭の映像作家の小森はるか氏にも、《そっちなやない、こっちなや—コミュニティ・ケアへの道—》における柳澤監督の「関わり方を固定しない映画製作」の核心に迫るテキストを寄せていただきました。精神科病院相談員の吉田晶子氏には、《養護学校はあかんねん！ '79.1.26-31 文部省糾弾連続闘争より》が記録した闘争の示す、全ての人間が共に生きる社会の創造という仕事を見据え、考察を広げていただいております。本上映会企画者の国立国際美術館客員研究員の田中晋平も、《痴呆性老人の世界》と時枝俊江による保育映画を介して、「ケアする映画」の可能性を探る論考を執筆しました。

本配布資料が、ケアの視点から映画史を見つめ直す作業に寄与すること、さらに未来に続いていくケアの実践に、映像メディアがいかに参与しうるかを考え抜くために、活用されることを願っております。

A プログラム

《痴呆性老人の世界》(16mm / 1986年 / 84分 / 国立映画アーカイブ蔵)

製作会社：岩波映画製作所 製作：河上裕久・宅間由美子 演出：羽田澄子 撮影：西尾清
照明：藤来義門・久保賀作 録音：久保田幸雄・滝澤修 演出助手：堀山博子・井出洋子 撮影助手：高貴準三
ナレーター：斎藤季夫 選曲：戸高良行

○作品タイトルは、オリジナルを尊重して、本配布資料内でそのまま記載しています。

高齢化社会に突入していたバブル経済下の日本で発表され、認知症とその介護を主題としたドキュメンタリーの先駆として大きな注目を浴びた。病院で暮らす老人たち、一人一人の姿にまなざしを向け、あるべきケアのかたちを問いかける。本作が起点となり、羽田澄子はその後、《安心して老いるために》(1990年)など、「古い」をめぐる作品群を手掛けていく。

B プログラム

《おてんとうさまがほしい》(16mm / 1994年 / 47分)

プロデューサー：貞末麻哉子 撮影・照明：渡辺生 構成・編集：佐藤真 資料撮影：柳田義和 整音：滝澤修
音楽：秋元薫 ネガ編集：和田至亮 構成補：鈴木佳尚 特別協力：医療法人圭愛会日立梅ヶ丘病院
映画の世界で照明技師として働いてきた渡辺生が、アルツハイマー型認知症となった妻のトミ子を撮影し、彼女が日常に支障をきたしていく様子や入院した後の姿を記録した。《阿賀に生きる》(1992年)の監督・佐藤真が、本作の構成・編集を担当し、あえて露出オーバーやピントがボケたイメージも活用することで、作品を完成に導く。

《保育園の日曜日》(デジタル上映 [原版：16mm] / 1997年 / 20分)

製作：豊川保育園おやじの会 監督：佐藤真
撮影：相内津・井上史浩・城野剛史・船橋淳・邱淑婷・劉文兵・吉田賢一 ピアノ伴奏：佐々木洋子
ドキュメンタリー映像作家の佐藤真が、娘の通う幼稚園で、保護者たちとともに撮影した私家版の作品。コマ撮りなどの自由な手法に溢れた映画で、大人と子どもが隔たりなく、楽しみながら制作した様子が画面に漲っている。

C プログラム

《子どもを見る目—ある保育者の実践記録から—》(16mm / 1978年 / 45分 / 国立映画アーカイブ蔵)

製作会社：岩波映画製作所 製作：田中勝志 企画演出：時枝俊江 撮影：八木義順 ナレーション：伊藤惣一
○褪色したプリントでの上映です

東京のある幼稚園で、先生のサポートを受けた子どもたちが、自発的な創造活動を進めていく記録。箱積木を組み、大きな段ボールや道具を使い、子どもたちは次から次へと新たな遊びを創り出していく。思いついたアイデアが外れて失敗したり、泣いたりしながら、楽しく遊ぶために工夫を凝らす様子に、映画のカメラが密着する。

《ともだち》(デジタル上映【原版：35mm】 / 1961年 / 59分)

企画：日本私立幼稚園連合会 製作会社：岩波映画製作所 製作：小口禎三 構成・編集：時枝俊江・久保田義久
撮影：藤瀬季彦・栗田尚彦 照明：松橋仁之 録音：安田哲男 台詞：秋浜悟史 音楽：三木稔 語り手：白井正明
不安いっぱい幼稚園に入園した子どもたちが、運動や遊びを通じて、はじめての集団生活に慣れていき、夏休みに至るまでの期間を記録。せっかく出来た「ともだち」関係も、些細なことで拗れるが、状況が変われば繋がりが修復される。ゆっくりと成長を遂げる園児たちに寄り添う先生・藤村美津の姿も印象的。

D プログラム

《夜明け前の子どもたち》(16mm【原版：35mm】／1968年／116分／国立映画アーカイブ蔵)

企画：財団法人大木会 心身障害者福祉問題総合研究所 製作：国際短篇映画社 脚本：秋浜悟史 監督：柳澤壽男
助監督：梅田克己 撮影：瀬川順一 音響構成：大野松雄・小杉武久 音楽：三木稔 録音：片山幹男
照明：久米成男 編集：高橋春子・加納宗子 解説：植田譲

1963年に開設された重症心身障害児施設の「びわこ学園」における、医療と教育を一体化させた活動の記録。河原で行われる石運びの共同作業など、子どもたち一人一人の障害を見つめ、療育の方法が模索されていく。柳澤壽男の福祉五部作の原点であり、その後に撮影の瀬川順一、脚本の秋浜悟史、音響の大野松雄たちも、それぞれに障害児と協働したドキュメンタリー映画や演劇活動に携わった。



《夜明け前の子どもたち》 写真提供：国立映画アーカイブ

E プログラム

《そっちやない、こっちやーコミュニティ・ケアへの道ー》(16mm／1982年／110分／国立映画アーカイブ蔵)

企画：伊藤方丈 製作：記録映画「コミュニティ・ケアへの道」製作委員会 構成・監督：柳澤壽男
撮影：塩瀬申幸 録音：小林賢 スチール：小林茂 題字：沙羅千春 解説：伊藤惣一 作詞：森永都子
作曲：冬木透

愛知県知多市で暮らしている障害者たちの療育グループの二年間を追いかけたドキュメンタリー。市からの援助なしで、障害をもった人々が自らアイデアを出し、指導員や大工と協働しながら、作業所「ポパイの家」を完成させるに至る。個性的な障害者の姿を記録しながら、コミュニティ・ケア＝地域福祉のありかたを問いかけていく。

F プログラム

《養護学校はあかんねん！ '79.1.26-31 文部省糾弾連続闘争より》(16mm／50分／1979年／神戸映画資料館蔵)

企画制作：市山隆次 構成：大石十三夫・山邨伸貴 編集・インタビュー：山邨伸貴 撮影：小田博・小林義正
録音：若月治 整音：久保田幸雄 タイトル題字：須田雅之

1979年の養護学校義務化実施に反対するため、同年1月に文部省前で抗議に集まった障害者たちの姿を記録。不如意な身体から発せられ、義務化の問題点を指摘する人々の声は、映画を観る者にも、「共生」を目指す教育について思考することを迫る。完成後の半年間のみで、全国各地の集会などの場で200回を超える上映が行われたという。